

# スカイプで私のピアノを 聴いて、父は逝った



●ドイツ・シュトゥットガルト在住  
川口ローマン 恵美  
(作家)

プロフィール 大阪府生まれ。日本大学芸術学部ピアノ科卒業。ドイツ国立シュトゥットガルト大学大学院修了。日独比較の専攻で博士号取得。『ドレスデン物語』『サビでさえないドイツ人、主張できない日本人』（草思社）、『母親に向かない人の子育て術』（文芸春秋）、『住んでみたドイツ8週2版で日本の面白さ』（講談社+α文庫）、『ドイツで日本と東アジアはどう見られているか』（祥伝社新書）、『ドイツの国原能が分かる本』（草思社）、『なぜ日本人は一瞬でもつりの計算ができるのか』（PHP研究所）等多数。『講談社Webサイト』『講談社現代ビジネス』『JBプレス』等にも連載中

## パソコンに大映しになった父

父が亡くなった。六月に、「じゃあねー、また九月にねー」と手を振りながら別れた時、一瞬、これが最後かな？ という思いが頭をかすめた。でも、それは最近では毎度のことだったし、これまでは帰ってくる度に父は元気でニコニコしていた。だからその日も、「きつとまた大丈夫」と不吉な考えを振り払ったのだが、今度だけは本当になってしまった。父の死因は老衰だ。病気はなかった。ただ、亡くなる前は、ゴックンと飲み込む力が弱ってしまっ、食べ物が入って嘔吐することが多くなった。そんなわけで七月の終わりに誤嚥性の肺炎を起こして入院したが、それは抗生物質ですぐに治った。もちろん、今後のことを考えて胃腸に負担を減らすという選択もあつたが、バイ菌は唾液の中にもいるので、ど

つたら、もう年なのだから手術などせず、ゆっくり食べられるだけ食べれば良い。ただ、九月下旬だった帰国の予定は、もう少し早めようと、私は呑気に構えていた。ところが、八月半ば、父はお水も飲みづらくなってしまった。これは危ないと気づいたが、しかし私はその時、諸事情で、すぐに日本に飛ぶことができなかった。飛べるのは最短で一週間後。間に合わないかもしれない！ 「じゃあ、今のうちにスカイプで話そう？」と、弟夫婦が父の枕元にタブレットを持ち込んでくれた。ドイツの私のパソコンに父の姿が大写しになった。「パパ、待っててね。もうすぐ行くから」と、私は大声で言った。その時、ハツとした。父の視線が驚くほど鋭い。父は何も喋れなかったが、その目を見れば全てを理解していることが分かった。なぜ!? 最近では常にぼんやりと、全方面

## 盛大な拍手をしてくれた父

父はいわゆる企業戦士。戦後の日本の経済成長を背負って立った世代の人間だ。私の子供だった頃、一緒に夕飯を食べたことなどなかったが、その割には、思い出が山ほどある。それも楽しい思い出ばかりだ。スカイプに向かって「パパ！ ねえ、あれ、覚えてる？」と話しかけているうちに、いろいろな光景が次々と脳裏に浮んだ。大阪に住んでいた私たちは、日曜日に一家でよく六甲山に登った。山で飯盒を二つ使っ



待っていてくれた父

て、ご飯を炊き、カレーを作った。父は火を起すのが上手だった。あのカレーの美味しさは今でも忘れられない。

お正月が近くなると、風揚げをした。父は竹を削って炙り、市販の安い風を補強した。長い足を付け、十巻もの糸を繋いでかまぼこ板に巻きなおした。私たちの風は他のすべての風を席巻し、豆粒のようにしか見えないほど高く揚がった。弟と私は、どんなに得意だったか！

日曜日、家にいると、父は必ず私に「ピアノを弾いて」と言った。私はその度に「いやだあ」と勿体ぶって、でも、ちょうど練習していた曲を弾くのだった。一曲が終わると、「上手、上手」と拍手喝采してくれる父。そういえば、その後、大学を出てコンサート

で弾くようになってからも、父はいつも駆けつけて、最前列で盛大な拍手をしてくれた。

モーツァルトのソナタへ長調（KV332）を弾いた時のことは、とりわけはつきりと覚えている。やはり、日曜の午後、中一の頃だった。この曲は、三楽章の出だしがドラマチックで格好いい（と私は思っていた）。得意そうに弾いている自分と、それを聴く父、ピアノの横の窓、そこからの景色、空気の匂いまで思い出した。なぜ、こんなに鮮明に、あの日のことが蘇るのだろうか。

その時、「そうだ、あの曲を弾こう」と思いついた。しゃべることも、もうあまりない。「パパ、では今からピアノを弾きます」と、私はスカイプの中の父に言った。ピアノの前に座ると、そばにいた三女が、ノートパソコンを私に向けて抱えた。練習不足なのでゆっくり弾いた。あとで弟が、「親父、リズムに合わせて指を動かしていたよ」と教えてくれた。

## 「これでパパはもう怒らな〜」

私は、翌日もスカイプでピアノを弾いた。バッハの平均律。そして「赤とんぼ」と「エーデルワイス」。父のお気に入り、私がいつ

も伴奏をした曲だ。

父は歌が大好きだった。若い時から晩年まで、いつもどこかのコーラス団で歌っていた。あまり動けなくなつてからは、部屋にこもつて楽譜を見ながら、かつて歌ったレクイエムなどを聴いていた。しばらくすると、「もう疲れるから、今日はここまで」と弟が言って、「じゃあね、またね」と手を振ってスカイプを切った。その夜十時頃、同じホームにいる母が「おやすみなさい。また明日」と言って、自分の部屋に戻った。十一時、ホームの人が見回りにきて、「川口さん、大丈夫？」と声をかける。父は頷いたという。

その一時間後、再び見回りにきた人が父の体位を変えようとして、初めて亡くなっていることに気づいた。それほど安らかに、一人で、父は逝った。そのあと私が日本に着くまで、父は待っていてくれた。エンバミングという化学処理を施されたとかで、生きている時よりも綺麗な顔だった。納棺の時、楽譜の横に、今までのお札と、すぐに掃れなかつたお詫びと、その言い訳を山ほど書いた手紙をそつとしいせた。「これで大丈夫。パパはもう怒らない」と思いながら。ただ、父がもういないことだけは、今もまだ信じられない。